

〈公開授業①〉

南小国町立南小国中学校 2年1組 単元名 球技「バレーボール」

南小国町立南小国中学校 教諭 益田誠悟

【授業者自評】スライドを使用

益田誠悟 教諭

阿蘇郡市では、「学び合いの中で知識を深め、技能を高める学習をめざして」のテーマのもと、授業づくりを進めてきた。

本時のめあては、「三段攻撃につなげるためのレシーブ」で意識することをチームで出し合うものだった。運動の苦手な生徒も、ボールをキャッチして味方にパスを出すなど、自分にできる形でゲームに参加する姿があった。

授業のオリエンテーションでは、みんなが楽しめて、関わることのできる授業をコンセプトにすることを生徒に伝えていた。運動の技能に個人差はあるが、自分にできる形で授業に参加している。みんなが楽しめて、関わることのできる姿が見られたという点では、自分自身の求めていた授業が展開できたと思う。バレーボールではパスをしたり、スパイクを打ったりをするなどの個人技能も大切だが、それだけではなく、サポートする動きも楽しさであり特性でもあると考えている。

スリーアップ運動はスキルアップ、モチベーションアップ、ウォームアップから構成されている。特徴としては、単元の主活動に近い動きに習いながら、技能を高めていくものである。その活動の中で、今日のスリーアップ運動では、視点を「オーバーハンドパスにこだわること」とした。生徒の実態として、足を動かさずに、アンダーハンドパスを使ってしまうことが多いので、普段の授業からオーバーを重点的に指導している。加えてボールをもらう時に味方の視界に入り、パスを出す人に体を向けることで自分がいることをアピールするように指導してきた。

単元計画にはスパイクを入れていなかったが、授業を進めていく中で意欲の高まりが見られたので、ポイントを絞り、映像をもとにスパイクも指導してきた。

本時はスリーアップ運動の後に、【ゲーム1】を行った。目的は課題を把握することである。試合をしながら、ゲームで意識することを考えさせて活動に取り組ませた。【ゲーム1】で見えたチームの課題について話し合いをさせた。話し合いの材料をもとに、【ゲーム2】で試してみる。さらに【ゲーム2】の試合間にも話し合いをさせ、より内容を深めていった。わずかだが、【ゲーム2】の中でも生徒に変容が見られた。

試合を終えての振り返りでは、めあてに迫る感想も多く出ていた。単元の当初に比べると、話し合い活動の中で、こちらが提示した内容については、子どもたちなりに自分たちの言葉で話し合いをする姿があり、生徒自身の意見を伝える力は上達している。しかし、声を出すことが必要という意見も出ており、声の種類にも色々あり、この部分をもっと掘り下げ、具体的な言葉にはどのようなものがあるか考えさせてもよかった。全体への指導を継続しながら、今後は表現が苦手な生徒にもよりスポットを当てて手立てができればと思う。

全体を通して、後半のゲームが間延びしたのが反省としてあげられる。得点係として役割を持たせたり、時間ではなく得点で競わせたりすれば、活動にさらに活気が生まれたと思う。

質疑応答①

Q 男女共習は、他の単元でも行っているのか。

A すべての単元で男女共習。ただし、柔道や水泳などはグループやペアの配慮をしている。

質疑応答②

Q コーンを回らせた意図は何か。

A 一度コートの外に出て、空いているスペースに気付かせ、ボールを持っていない時にどのような動きが必要なのか、客観的に考えさせるため。

質疑応答③

Q ボールをキャッチさせない場面が今後も継続してあるのか。

A ボールをキャッチさせる意図は2つある。1つ目はラリーをつなげるためであり、2つ目は苦手な生徒への配慮である。これは、バレーボールを3年間系統的に実施する場合の手立てである。3年生では、原則キャッチをなしにして、より本格的なバレーボールを味わわせたい。

質疑応答④

Q スリーアップ運動をいきなりして大丈夫なのか。

A スリーアップ運動の内容の意図を生徒に確実に理解させ、意識化を徹底した。また、単元を通して段階的に運動量を上げてきた。ケガ防止のため、始めに柔軟運動を取り入れ、スリーアップ運動につなげた。

質疑応答⑤

Q ボールについての工夫は何か。

A できるだけ軽量で、運動が苦手な生徒でも扱いやすいものを選んで使用した。

主体的・対話的で深い学びを行うために、学習のながれが、子どもたちがしっかり分かるような手立てがされていた。オリエンテーションでは、学習のながれに触れるとともに、ホワイトボードにも本時のながれが書かれていた。子どもたちが主体的に学ぶためには、学習のながれが分かっていること、見通しを持つことが大事になってくる。

話し合い活動については、話し合う視点について学習シートへの工夫が見られた。簡単なチェック項目を設けることで、話し合う内容の焦点化ができていたと思う。また、レシーブからトスへのながれ、トスから3球目へのながれが提示してあったので、子どもたちもそこに絞って意見を交わすことができていた。合わせて、スクリーンにポイントや視点と提示してあったので、それを見ながら学習を進めることができていた。話し合いを深めるための手立てがよくされていた。

教材教具・ルールの工夫では、ボールが柔らかいものを使用して、ICTの活用があった。また、キャッチができるというルールのもと授業が進められているなど、工夫がなされていた。

授業研究会ではキャッチありについて話がされていたが、新学習指導要領では基礎的・基本的な技能の習得をきちんと図ることが重点化されている。体育の基礎的・基本的技能とはどういうものかと振り返った時に、バレーでオーバーハンド、アンダーハンドとは記載されておらず、ネット型に共通した知識・技能を習得するという形で記載してある。すべてのネット型で共通した技能があるわけではないが、種目が変わった時にも同じような視点の知識技能がついておくことが学びとして必要である。

準備運動については、けがの防止が第一であり、子どもたちが体を温めて活動に入ることが大切である。今後、気温が下がってきた時には、今日の内容に加えて体温を上げる活動を先生方が考えていくと良いと思う。

阿蘇郡市の取組については、指導と評価の一体化というところで、ゴールを見据えた単元計画の作成、レディネステストによる生徒の実態把握、生徒に身に付けさせたい力を明確に設定し、それを受けて単元を設計することで、より系統的に生徒の実態に応じた授業をされていた。

指導と評価の一体化というところでは、生徒の現状に基づいて、3年間の見通しをもった年間指導計画の作成が大切である。どの時期に、どの単元を、資質・能力の三つの柱の具体的な指導内容を計画的に配当し、3年間で身に付けさせたい力の見通しを持って作成していただきたい。併せて、中学校第1学年及び第2学年においても、2年間の見通しをもって、効率的で効果的な指導と、評価の計画を作成することが大事であるということも新学習指導要領に記載されている。また、「学び合う活動による思考の再構築化」では、授業にもあったように話し合う視点（めあて）の明確化、知識技能の習得の場づくり、ホワイトボードやICTの活用がなされ、子どもたちが自分たちで話し合いを進められるための教師の準備があった。

今年度の1年生は、体育理論と保健分野で学習内容に変更があるので、3月までに各学校で計画的に指導を行っていただきたい。

〈公開授業①〉

阿蘇市立一の宮中学校 2年1組 単元名 器械運動「マット運動」

阿蘇市立一の宮中学校 教諭 志賀 貴文

【授業者自評】

志賀 貴文 教諭

今日の授業は、生徒が緊張はしていたが、いつも以上に頑張って活動に取り組んでくれた。

本時のめあては、「自分に合った技を選び、技の出来映えを高めよう」ということで、技能の向上を中心に据えた。単元全体を通して、自分で技を選び、授業を行ってきたので、生徒自身が課題に対して意欲的に活動する姿が多く見られた。

前回の授業までに伸膝前転、後転倒立、倒立前転、前方倒立回転の4つの発展技の中から生徒に自分が挑戦する技を選ばせた。前回の授業の後に生徒が選んだ発展技から、自分の技能に応じて挑戦する発展技を変更する生徒もいた。変更をする際には、自分の技能に応じたものか、自分の技能で安全に技に取り組めるものかを考えさせ、技を変更したい生徒には変更をさせた。

今日の授業では、教師の見立てでは8割の生徒が出来映えを高めることができたと思う。出来映えを高めることができた理由として、グループでの話し合い活動が有効であったと思う。話し合い活動は本時だけの取り組みではなく、単元を通してグループでの話し合い活動を行ってきた。その際に、単に話し合いをさせるのではなく、各グループに話し合いの視点を持たせるようにしてきた。例えば本時の授業の場面では、倒立前転のグループには、どのタイミングで体を丸めればよいか。後転倒立のグループには、腰をどのタイミングで引き上げればよいか等、技の出来映えを高めるための視点を提示して話し合い活動に取り組ませた。話し合い活動では、タブレットで撮影した生徒自身の映像と、模範となる映像を見比べて、動きの違いから技のポイントとなる部分を見つける生徒もいた。その話し合い活動の後に発展技の練習を行うと、ポイントとなる動きに着目しながら練習をする姿が見られた。その結果、生徒の感想用紙にも発展技ができるようになった、技の出来映えを高めることができるようになった等の感想を書いている生徒も多くいた。

質疑応答①

Q 発展技の技の要素のなかに倒立がある。一人での倒立の練習はどこで行っているか。また、倒立の際の徹底指導したポイントを教えてほしい。

A 一人での倒立は、毎授業の授業で練習の時間を確保している。しかし、倒立で静止することは難しいので、着手したときに肘を伸ばすように指導をしている。

質疑応答②

Q 発展技の倒立回転跳びへつながる基本的な技として倒立ブリッジがあるが、単元計画の中には倒立ブリッジを学習したと記載されていない。倒立ブリッジは学習しているか。

A 倒立ブリッジは第2時の基本的な技の学習の際に行っている。倒立からブリッジをすることを苦手な生徒が多くいたので、練習としてその後の授業でも取り組んでいる。

質疑応答③

- Q 生徒が補助をする際に気づいたポイントを、自分で技の練習をする際に役立てることができるということが補助をすることの良さだと思うが、補助をしていた生徒で倒立ブリッジと倒立回転跳びの関連に気づいている生徒はいたか。
- A 体を反るということがどちらの技でも重要だということはわかるが、関連については知識として理解はしていない。

質疑応答④

- Q マット運動は授業中に怪我が起きやすい領域でもある。安全面の配慮でどのようなことに気をつけたか。
- A すべての生徒に張り付いて授業ができるわけではない。だからこそ、補助の方法は徹底して指導をしている。

質疑応答⑤

- Q 体育の授業で話し合い活動をするときに論点が定まらずに困る。志賀先生は論点を明確にして授業をしていた。どのように論点を設定しているか。また、タブレットを利用していたが、どのような使い方をされていますか。
- A 視点を持たせた話し合い活動は阿蘇郡市中体研のテーマとして取り組んでいるので、毎時間意識して取り組んできた。特に具体的な動きについての視点を与えるようにしている。論点を設定する時には生徒の思考を焦点化することができるようなテーマを設定するようにしている。マット運動だけでなく他の種目でも取り入れている。
- A タブレットの利用については、タブレットはあくまでも補助教材だと考えている。タブレットの操作に気をとられすぎると、教師が意図した方向から外れる場合があるので、今回の授業で言うならば、生徒自身の動きを撮って、自身の動きを確認するための道具として利用した。

授業が始まる前に体育館にきた生徒たちが、話し合いの根拠となる情報を壁面で確認していた。話し合いをするためには、そのための情報を生徒が持つことが必要である。その情報を壁面に掲示している先生の細やかな工夫が見られた。本日の授業では、ミニボードを利用した話し合い活動が行われたが、ミニボードでの情報の活用の利点として、「視覚に訴える情報であること」、「話し合う時の情報の整理になること」、「発表するときの根拠を示すものになること」の3点が考えられる。本日は、生徒達がミニボードを囲って話し合う姿が多く見られた。これは、生徒達が技能のポイントを見つけるために、ミニボードが有効だと感じているからこそその姿だと思う。生徒が話し合いに必要ではないと思えば、今日のような熱心に話し合う生徒の姿はみられなかったのではないかと思う。本日の生徒の姿になるまでには、授業者の志賀先生が、生徒にとって有効な情報を与え、ミニボードを活用することが技能向上につながる大きな要因だと生徒たちに粘り強く指導をされてきたからだと思う。実際に、今日の生徒たちの話し合いの様子を見ていると、「ホワイトボードには見る視点がこう書いてあったから、技のこの部分を意識したけど、実際に自分の映像を見るとこういう状態なのか。」と有効な情報から、自分達で考えた技のポイントを見つけ、練習している生徒自身の様子をタブレットで見て、イメージした動きと実際の自分の動きが違うことに気づいていた。この気づきがあったから、自分のイメージした動きに近づくことができるように、何度も技の練習に取り組む生徒の姿があり、できた時には周囲の生徒が拍手をおくったり、歓声があがったりするような授業になった。また、授業者の志賀先生は生徒が動きの分析をすることができるようになることにも非常にこだわりを持って取り組まれていた。生徒たちは動きの分析をする経験があまり多くはない。だからこそ、電子黒板に映像を映し、何度も繰り返して見せることで生徒たちの目を肥えさせた。結果として、生徒同士でアドバイスをする姿として現れていた。

阿蘇郡市の研究の視点は2つある。1つは「思考の再構築化」である。阿蘇郡市では、生徒自身が「こうではないか」と1つの考えを持ち、その考えをグループや学級で話し合うことで最初に抱いた自分の思考が揺さぶれることを再構築化として考え研究を行ってきた。思考の再構築化をするためには、生徒が考えた意見に対して生徒や教師が、「どうしてそう思うのか」と質問をし、その質問に答えるために更に生徒が考えることが必要になってくる。本日の授業では話し合い活動の際に多く見られ、志賀先生がこれまでにしっかりと指導をされてきたことが伝わってきた。2つ目は、「ゴールを見据えた単元計画の作成」である。指導案をご覧いただければわかるように、生徒の実態把握に非常に力を入れている。曖昧な実態把握では授業内容を変更しなくてはならなくなったり、生徒が実際に技をやってみて「私には無理だ」と思わせてしまったりすることがある。そのため生徒の実態をしっかりと把握したうえで単元計画が作成されていた。

本日の授業を参観し、生徒たちへの学習訓練がきちんとされていることや、生徒と教師の信頼関係が築かれていることがわかる授業だったと思う。

最後に、新学習指導要領への移行が県下でうまくいっていない実態がある。3年生の分野が1年生に移行できていない学校がある。参加された先生方は各学校に戻られ、新学習指導要領への移行が円滑に行われるようにしていただきたい。